

イメージリテラシーのレッスン

伊藤京子^{†,††} 久保田 テツ[†]

情報通信技術の発展により、人々の表現の場とその可能性が拡大したが、それゆえに顕在化した問題として、私たちの表現を読み解く力の未成熟さが挙げられる。本論文では、表現を読み解く力の衰退を問題意識とした。まず、「表現に接する」と「イメージリテラシー」と、そして、メディアとの関係を検討した。そして、表現の中でも「みる」ことに着目し、さらに、新しい撮影機器の利用として、携帯電話の写真を利用した枠組みを検討することとした。次いで、大学教育での試みを対象とし、イメージリテラシーについて検討した。そして、私たちの「イメージリテラシー」を守り、育てるために、現在のインターネット上の表現の場に加え、新しい場が創出を検討する。

Image literacy lesson

KYOKO ITO^{†,††} and TETSU KUBOTA[†]

Though the place and the possibility of the people's expression have been expanding by the development of the information-communication technology, the immaturity of power to read our expression is actualized as a problem. In this paper, the promotion of power to read the expression is considered. First of all, the relation between "touch the expression", "Image literacy", and media is examined. And, it is paid attention to "see" some expression, and a frame using the photograph of the cellular phone is examined as use of a new movie camera machine. Next, the image literacy is considered for the attempt by an academic education. And, in order to defend and raise our "Image literacy", a new place in the present Internet is considered.

1. はじめに

コミュニケーション能力の育成が注目されている。家庭内での親と子供のコミュニケーションや、社会での専門家と一般の人とのコミュニケーションなど、異なる立場や意見をもつ人々間のコミュニケーションが難しい場面が多くみられ、それぞれの場面で相手の考えを理解し、自分の考えを伝えるためには、どのような能力や態度が必要とされるか、が検討されている。そして、教育現場では、どのようにコミュニケーション能力を育成するかが検討され、課題が示され始めている¹⁾²⁾。これらの現実の場面と並行して、インターネットやコンピュータなどの、新しいメディアを利用したコミュニケーションの場でのコミュニケーション能力の育成も、大きな検討課題である。

近年、ブロードバンドやパソコンの普及、コンピュータリテラシーの向上に伴い、インターネットやコンピュータを利用したコミュニケーションに関わる人の数は増加の一途を辿り、携帯電話も含め、メディアを用いたコミュニケーションは、非常に活発に行われている。

これらの状況に伴い、これまではマスメディアのみが可能であった、多くの人への発信の機会が増加している。例えば、文字表現を用いたブログ、写真を公開するインターネットサイトの flickr³⁾、映像を公開するインターネットサイトの YouTube⁴⁾ などが、挙げられる。インターネット上のこれらの公開サイトを利用すれば、文字や写真、映像を用いて多くの人に対して容易に発信できる。

それらの発信内容の中には、プロの表現や素人の表現が混在するが、発信の場が増えたことで、私たちの表現に接する機会が増え、そしてそれらを読み解く力をもつことが重要となる。

本論文では、画像である「写真」に着目し、画像に向かうことのできる「リテラシー」を獲得する方法を検討する。

[†] 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター
Center for the Study of Communication-Design, Osaka
University

^{††} 大阪大学大学院基礎工学研究科
Graduate School of Engineering Science, Osaka
University

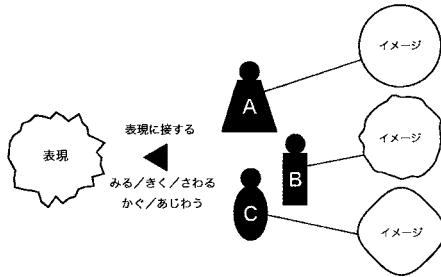


図1 表現に接する

このようなリテラシーの獲得は、高等教育の現場での大学における「教養教育」の一環として、現在、注目され始めている。

以下、第2章では、本論文で提案する、表現に接する際の力として、「イメージリテラシー」を説明する。第3章では、画像を対象として、大学教育でのイメージリテラシーに関連する教育の試みを検討する。そして、イメージリテラシーのための、インターネット上での新しい場の提供を検討する。

2. 「イメージリテラシー」の思考：表現に接する

2.1 表現に接する

本節では、まず、表現に接することに関して検討する。

他者の表現は、往々にして不可解であるが、他者には他者なりの意味があり、それぞれの価値をもつ。他者の表現に正面から向き合った際の、「わたし」の存在を私が探り、同時に理解できない他者に出会うことの豊かさを知ること、そして、個々の知識や常識に頼らず、想像し、妄想し、創造すること。「不可解なあなたの表現に出会う不可解な「わたし」と「知らない」ことの豊かさを痛感する」が、本論文で主張する、表現に接する際に重視することである。

図1に、本論文で提案する、「表現に接する」を示す。図1中の「表現」は、他者の表現を示している。この表現に対して、「みる・きく・さわる・かぐ・あじわう」などの五感を通じた接し方をして、それぞれの人がそれぞれのイメージを抱く。その際、表現に対応して、それぞれの人がそれぞれのイメージをもつこととなる。図1では、この「表現」と「イメージ」を形として表している。「表現」の形がじぐざぐの外形を持っている場合、ある人(A)のイメージは丸となり、ある人(B)のイメージは、「表現」とは異なるじぐざぐの外形となる。また、他の人(C)のイメージは、丸

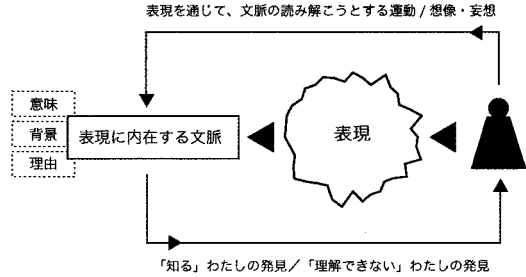


図2 イメージリテラシー

まった菱形となり、それぞれの人が、それぞれの「イメージ」を抱く。

2.2 イメージリテラシー

前節で、「イメージ」という言葉を使ったが、本節では、「イメージ」に関して検討する。

「表現」とそれに対応する「イメージ」について、「イメージリテラシー」がある。フォザらは、イメージリテラシーを、「絵画や写真、映画などのイメージを読み解くための技術」としている⁵⁾。また、イメージリテラシーと似た概念として、メディアリテラシーが挙げられる。メディアリテラシーは、「メディアを読み解く力」とされることが多い⁶⁾。

ここで、本論文では、単に、表現の作成者の意図を汲み取ることを、表現に接する目的とせず、表現に接した際に、受け手が感じる想像力を、「イメージリテラシー」と考える。これは、鷲田が提案している、「想像」する力である。「ここにあるものを手がかりにここにはないものを想う」力である⁷⁾。鷲田は、この力を、「文化をつくるもの、支え、突き動かし、編みなおしを迫るもの、表現や創作として力強くはたらくもの」としている。

本論文では、「ここにあるものを手がかりにここにはないものを想う」力を、イメージリテラシーとし、イメージリテラシーの中でも特に、「みる」力に着目する。

本論文で提案するイメージリテラシーの概念図を、図2に示す。

2.3 「みる」とメディアとの関係

本節では、「みる」とメディアとの関係を検討する。

「みる」に対応するメディアとして、まず、写真が考えられる。写真の概念は、紀元前よりレオナルド・ダ・ヴィンチにより原理が生み出されたといわれているが、一般に、世界初の写真は、1826年のニエプスによるものとされている⁸⁾。写真が発明されて間もない頃、人々は「魂も吸い取られる」などの妄想をもって、その画期的な技術に戸惑った。それほどに、写真

技術以前の人々は世界を切り取りあらためて「みる」ことに慣れていなかった⁹⁾。

次に、映画が登場した。多くの人々は、映画の創世記には、まだ、「みる」ことに慣れていなかった。世界初の上映会の様子を知らせる新聞記事には、煙、波、風になびく樹木など、それまで気に留めていなかった「動いているものごと」そのものが映像というメディアに焼き付けられたことに、人々が感嘆した、示されている¹⁰⁾。

そして、写真や映像というメディアに幾度となく触れ、慣れ親しむ機会が増えた現代人は、様々な情報群(意図を持って構成される画面、言語、色の意味など)にさらされてしまう。

現代において「みる」行為は、すでに他の情報に補充されてしまう。それは多くの成人が、生まれたばかりの子が視覚から得られる世界をただただ無防備に受け取るようにはできないことから理解できる。すでに成人には、目の前にある景色を、自身の過去の体験はもちろんのこと、昔見たテレビ、映画のワン・シーンや、知っている物語などの言語や、もしくはは無意識に見ていた広告の心地よい印象であろうとも、それらの雑多に記憶/蓄積されてしまう情報の介入もしくは影響なく世界を「みる」ことは困難である。常にイメージに付加、介入、影響されてしまうさらに、現代では、このイメージへの付加、介入、影響を理解するためにも、それを感じる力が必要となっている。

これらの状況を鑑みると、現代の問題は、大きく2つある。

1つの問題は、介入してくる様々な情報群のその多くがテレビや広告などのマスメディアからの影響を受けやすいことにある。これにより、本来イメージが持つ自由で多様な性質は、画一化へと向かい陳腐化する。赤いバラは情熱を意味することを繰り返す、あげくの果てにバラ自体が陳腐化してしまう。

もう1つの問題は、その自覚性のなさにある。「みる」ことに自覚的でないということはすなわち、「みていない」ことを示す。人々はテレビ、グラビア写真などのマスメディアによる大量発信によってあらためて「みる」ことを知り、幾度と慣れ親しむうちに他の情報群と照らし合わせイメージを見ることによって、「みていない」状態に陥っている。

2.4 「表現に接する」ためのしかけ

以上の問題への対策として、イメージへの付加、介入、影響のない場を用意し、自覚的にイメージと出会うことが望まれる。

この場合、自覚的にイメージと出会うためには、他

の情報群からできる限り遠ざけられたイメージとの出会う場が必要となる。そして、他の外乱からの影響をうけにくくする。

本論文では、このような場の提案に向け、3章以降検討するが、「みる」ことに対応するメディアとして、「写真」に着目することとする。

3. イメージリテラシーのレッスン：大学教育の試み

本章では、前章で提案したイメージリテラシーに関して、その獲得方法を検討する。

3.1 検討課題の設定

「みる」ための対象は、静止画像、動画像など様々なに検討できるが、今回は、静止画像としての「写真」を対象とする。

まず、すべての自由が許容された状況で、「みる」ことに直面することは、困難が予想されるため、一定の制約を設けた枠組みを提案し、その中での解釈の可能性を検討する。

次に、一定の枠組みの中で撮影された写真に向き合った際、撮影者が意図しない文脈を、観察者が読み取ることがありうるか、を検討する。これは、一般的にありうるものが想定できるが、ある限られた文脈の中でも、そのような解釈がありうるか、また、どのような例がありうるか、を検討する。

そして、撮影者や他の鑑賞者のもつ文脈を知ると、自分の「みる」こと、すなわち自分の解釈に、影響を受けうるか、を検討する。

以上をまとめ、以下の3点を検討することとする。

- A. 与えられた枠組みの中で、人は「写真」をどのように解釈しうるか
- B. 他者が撮影した「写真」を、人は撮影者の意図しない文脈で読み取りうるか
- C. 撮影者や第三者の解釈を知ると、人は自分の理解に影響を受けうるか

3.2 試行環境の設定

前節で検討した課題を検討するための、試行環境の設定を検討する。

全体の枠組みとして、何らかの意図をもって「写真」を撮影してもらい、その意図を発表してもらおうとともに、複数の鑑賞者がその「写真」を解釈する場を設定する。その際、解釈の自由度を制限するために、撮影の際の制約条件を用意する。ここで、今回は、制約条件として撮影対象と撮影機材を検討する。撮影対象として、自分の持ち物や日常に関わる環境なども検討できるが、鑑賞者の解釈を制限しつつ、想像を膨らませ

る余地をもたせ、抽象的な撮影テーマを設定することとする。撮影機材に関して、現在は、高性能のデジタルカメラも普及しており、アングルやシャッター速度に工夫を凝らせ、撮影技術をもつ人が技術を活かした写真を撮影することも検討できるが、多くの人が持っており、日常的に利用が可能な撮影機材として、携帯電話のカメラを検討し、技巧を凝らした写真ではなく、対象を単純に撮影した写真を利用することとする。

撮影者や鑑賞者に関して、その属性を広く設定し、多様な人々の解釈を検討することも考えられるが、今回は、解釈に制限を設定し、「写真」を「みる」ための課題を検討する観点から、対象者の年代や属性を一定とすることとする。

本論文では、イメージリテラシーを対象に、「みる」ことの意味を検討している観点から、大学の授業を対象に、上記の設定を実施することを検討する。全体の流れを以下とする。

- (1) 撮影テーマを提示し、携帯電話を用いて、テーマに沿った写真を学生に撮影してもらう
- (2) 撮影した写真を用いて、学生に撮影した意図を紹介してもらう
- (3) 撮影者以外の学生に、その写真を見て、自分はどうように解釈したかを発表しあってもらう

上記(2)の中で、「写真」の解釈を通じて、他者をイメージする機会の提供を検討する。そのために、撮影した意図の紹介に際して、単なる写真の紹介ではなく、写真を通じて自己紹介を行ってもらうこととする。通常、自己紹介とは、自分の名前や所属、役職などを並べ、自分がどこに位置付けられているかを他者に伝える場合が多い。この場合、その内容から、「わたしが何であるか」を伝えることは難しく、自分が獲得した場所なのか、仕方なくそこにいるのか、など、自分自身の感じている内容を伝えづらい。今回の自己紹介では、その人の顔、興味の所在、人柄など、伝えられた“印象”が浮かび上がり、相手のことを想像する場を作ろうとしている。そして、与えられたテーマを介した写真を通じて、写真を鑑賞する者が、それを撮影した人物を想像し、紡ぎだし、創造する場を提供することとする。

3.3 方 法

前節の設定にもとづき、試行を行うこととした。

大学の授業の中で、90分授業2限連続の180分の中で、行うこととする。実施の流れは、前節の設定より、以下とする。

- (1) 次回の授業で撮影した写真を用いて「自己紹介」してもらうことを学生に説明し、宿題として撮影

のテーマを提示し、テーマに沿った写真を携帯電話を用いて撮影し、用意してくるように伝える

- (2) 授業で、各学生に写真を用いて5分程度で「自己紹介」の発表をしてもらい、発表後、他の学生と意見交換してもらう(1名あたり自己紹介5分程度、意見交換5分程度)

上記の流れをもとに、撮影のテーマを検討する。

前節の検討より、抽象的なテーマを検討し、「愛している」ものを検討した。「愛している」は、学生が皮膚感覚で感じることができ、かつ日常的ではあるが、個々によってリアリティが全く異なることが予想され、個人により異なる感覚を表現できるとともに、受け取り方の多様性が期待できると考えた。ここで、予備的試行として、2006年度の授業で、「愛しているもの」をテーマとして、同様の課題を与えたところ、撮影された写真の中には、ほとんど人物が移されていない。これより、「愛しているもの」のテーマ設定は、“ひと”を連想させず、学生の想像力に必要な以上の制約を与えることが予想されるため、テーマの表現方法を再検討することとした。そこで、各々が主体となり、身体化されてはいるが、曖昧でつかみどころのない言葉として学生に受け取られるテーマを選択することとした。そして、学生にとってリアルな「わたし」を表現できるように、テーマの表現方法を工夫することとした。

以上より、テーマを「愛してる…」とする。

3.4 結 果

授業の参加学生は、31名となった。

提示された写真は、様々であり、以下に例を挙げる。

- ベット
- お酒の銘柄
- 肌身離さず持ち歩く音楽プレーヤー
- 彼女からもらった大切な品
- お世話になった先輩達を思い起こす部屋
- 恋人

また、自己紹介の内容の例を以下に挙げる。

- 憧れの先輩にももらったマスク
- いつも独りに寄り道できるスタバ
- 孫
- そんなものは無い
- わたしが毎日彼に対していう言葉(恋人の写真を示しながら)

自己紹介は、直接的な愛の対象を語る、モノを介して間接的に他者を語るなどに分類できた。

次に、提示された写真を例として、撮影者の視点と鑑賞者の視点を検討する。図3に示す写真と図4に示す写真を対象とする。本論文では、図3に写真を仮に



図3 窓



図4 サークルの部屋

「窓」、図4に示す写真を仮に「サークルの部室」と名付ける。以下、それぞれ例1と例2として検討する。

(例1)

図3の写真を提示した学生の紹介は、以下のようなものであった。

「私は寮で生活している。そこでは規則正しい生活を強いられており、食事や片付けなどの時間も予め決められている。この窓の写真は、それら寮生活における規則から全て解放されて、自分部屋に戻った際にみる風景である。これから“自分の時間”が始まるのだ、という景色である。“愛してる”というテーマを考えると、このような象徴的な写真になる」

この写真を鑑賞した他の学生の意見は、以下のようなものであった。

- 窓が開いている状態が、誰かが入ってくるように感じる。だから、誰かもしくは何かを迎え入れるために開かれているように見えた。
- 朝なのか夕方なのか…光の色からすると夕方ではないかと思った。
- 窓に映り込んでいるのは隣のビルの壁ではない

だろうか。だとすると外の景色が見えず可哀相

- 窓枠のサイズと位置が気になる
- 孤独な感じがする

これらの解釈より、撮影者の背後にある文脈によって切り取られた1枚の写真について、鑑賞者が各々の視点でその世界を読み解いていく様子が見受けられる。

写真のみならず、美術や表現の領域では、提示された作品について先に解説に目を配らない限り、このような現象は自然である。表現について予めの文脈が提示されず解説が施されない状況においては、鑑賞者はそこに、(望まざるも)自由に目をやり、好きに解釈し、読み解くこととなる。撮影者の希望に満ちた時間を、「孤独」と読み解く鑑賞者や、「誰かが入ってくる」と解釈する鑑賞者がいる。このそれぞれの解釈が、1枚の写真に多様な世界を生成し、そこに触れたそれぞれは「わたしはどういう世界を見出したのか」と問われ、もう一度写真をみつめることとなる。

(例2)

図4の写真は、部屋の全体像が映し出され、その中に先輩や同級生などの複数の人物、こたつ、冷蔵庫、電子レンジ、棚に並べられた小物など、雑然とした風景が示されており、図4の写真を提示した学生は、その部屋の状況や、映り込んだ人物について説明した。

この写真を鑑賞した他の学生の意見は、以下のようなものであった。

- わたしの所属する部室には、そんな機材はない
- 広くて羨ましい

鑑賞者の感想は、自身の所属するサークルの状況や部室の様子と比較する発言となった。鑑賞者は自身の身近な体験に照らし合わせて写真をみつめ、その差異について言及した様子が見受けられた。

例1と例2のそれぞれの写真と、鑑賞者の感想を検討する。

例1の写真は、フレーム全体に開かれた「窓」のみが大きく映り込み、その他、具体的なモノやコトが判断できるような視覚的要素は少なく、抽象的なビジュアル表現である。例2の写真は、日常的なオブジェに満ちあふれ、撮影者の具体的な生活の断片が切り取られている。

写真で切り取られた内容の差が、鑑賞者の感想の差として表現されている。

例1の写真に対しては、その抽象度から、鑑賞者は自身の主観的な印象を述べ、「窓」という与えられた視覚素材に対して「わたし」を向き合わせる。例1の撮影者の「窓」を明確に示すためのビジュアル要素を、鑑賞者自身が持ち得ないことが予想される。これより、

鑑賞者自身の文脈の中にある「窓」があまりにも多様であることで、「窓」を語る軸足を鑑賞者自身で規定する必要があることが考えられる。このため、鑑賞者自身が「わたし」の「窓」を語ることが要求される。

例2の写真には、鑑賞者自身の体験と大きく違う世界が写されている結果となった。サークル活動や部室、誰とはわからないが笑顔の人々が写されている。この撮影の後、何人かはバイトに散り、何人かは泊まり込み、ひよっとするとお酒を飲み、深夜の恋愛話に華が咲くのかかもしれない、などの予想が、鑑賞者にとっては容易であった。鑑賞者から発せられた「わたしのサークルとは違う」といった趣旨の言葉は、そこに“大学生活”という、共通した文脈をはっきりと見ていることが示されている。鑑賞者の体験的な文脈を、撮影者も同じく有しているということが示されており、“大学生”が撮影者と鑑賞者を繋ぐフックとなっている。

例1と例2の写真には、撮影者の意図がどのようなものであるにせよ、そこに映り込んだ風景における情報、鑑賞者による「みる」という行為から読み解かれるべき情報、言い換えれば文脈の温度差がある。それより、鑑賞者の「みる」行為に差異が生じたのだと考えられる。

3.5 まとめ

前節の検討より、与えられた枠組みの中で、鑑賞者の写真の解釈の様子を示した。また、鑑賞者は、撮影者が意図しない文脈で写真を読み取ることがあることが、例1より示された。そして、撮影者と鑑賞者の意見交換より、鑑賞者の解釈が変化し、理解が変容する様子が見受けられた。

前節の例2より、写真の解釈において、撮影者と鑑賞者に共通の文脈を有することが、自分自身の体験や経験に置き換えた解釈の可能性を広げることが見受けられた。

4. おわりに

情報通信技術の発展により、人々の表現の場とその可能性が拡大したが、それゆえに顕在化した問題として、私たちの表現を読み解く力の未成熟さが挙げられる。

本稿では、まず、「表現に接する」ことの意味を検討した後、表現に接する態度として、従来とは異なる「イメージリテラシー」を参考とした。さらに、イメージリテラシーとメディアとの関係を検討した。本論文では、表現の中でも「みる」ことに着目し、さらに、新しい撮影機器の利用として、携帯電話の写真を利用

した枠組みを検討することとした。

そして、イメージリテラシーを検討する際に、大学教育での試みを対象とし、イメージリテラシーの獲得方法を検討した。

そして、このようなイメージリテラシーを育むためには、現在のインターネット上の表現の場に加え、既存のプロの表現に侵されない新たな場が創出されることが重要であり、私たちの「イメージリテラシー」を守るためには、不可欠であると考えられる。

本論文では、画像を対象としたが、さらに映像を用いた検討が考えられ、様々な表現へのリテラシーを高めることが期待できる。

参考文献

- 1) 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：コミュニケーションデザイン、<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/about/index.html> (2007年8月現在)。
- 2) 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：Communication-Design 2006 (2007)。
- 3) Flickr, <http://www.flickr.com/> (2007年8月現在)。
- 4) YouTube, <http://youtube.com/> (2007年8月現在)。
- 5) ジャン・クロード・フォザ (編著)：イメージ・リテラシー工場・フランスの新しい美術鑑賞法、フィルムアート社、東京 (2006)。
- 6) 水越伸：メディア・ピオトープ・メディアの生態系をデザインする、紀伊國屋書店、東京 (2005)。
- 7) 鷺田清一：〈想像〉のレッスン、NTT出版、東京 (2005)。
- 8) 港千尋：写真という出来事・クロニクル 1988-1994、フォトプラネット、東京 (1998)。
- 9) 吉見俊哉：メディア文化論—メディアを学ぶ人のための15話、有斐閣、東京 (2004)。
- 10) 長谷正人：リュミエール兄弟のアルケオロジー、<http://www.cmn.hs.h.kyoto-u.ac.jp/NO2/ARTICLES/HASE/6.HTM>, CineManaziNet! (2007年8月現在)。
- 11) 水越伸 (編著)：コミュニティなケータイ モバイル・メディア社会を編みかえる、岩波書店、東京 (2007)。
- 12) 伊藤京子、清水良介、久保田テツ：視線の見取り図～sensecape peroject の実践～, Communication-Design 2006, pp.191-214 (2007)。